

地域デザインフォーラム視察報告 (グループけやき)

日 時：2010年6月13日(日) 8:00～11:00

会 場：板橋区立けやきの公園(板橋区前野町一丁目48番5号)

説明者：(グループけやき・花づくりグループさくらの会)

飯島廣夫さん 齊藤ツヤ子さん ほか当日活動に参加されていた方々

出席者：(大東文化大学)

大杉由香環境創造学科准教授
(板橋区)

大澤宣仁板橋東清掃事務所長 宮津毅再開発課係長
村山寛子生きがい推進課係長 柏田真健康推進課主任
事

視察目的：板橋区前野町一丁目の公園新設にあたりワークショップを行っていたメンバーを中心に結成されたボランティア団体「グループけやき」の、「地域がつくる公園制度(旧公園の里親制度)」に基づく活動内容を現地調査し、10年間活動が続いている成功要因等について学ぶ。

1 板橋区地域がつくる公園制度とは

制度を所管する板橋区土木部みどり公園課のホームページ及び資料によると、板橋区地域がつくる公園制度とは、地域の共有財産である身近な公園を地域住民で見守ることにより公園の美化と郷土愛の醸成に寄与することを目的とし、板橋区と地域住民が公園の管理について互いの役割を決め一緒に管理するための協定を結ぶものと規定されている。

具体的な役割分担は、公園の清掃・除草・簡易な刈込み・遊

具の点検等を地域住民が結成したグループで行い、ごみの回収・トイレの清掃・樹木剪定・遊具の修理等を区で行うというものである。

なお、地域住民で結成するグループは、町会でなく、かつ誰でも参加できるオープンなグループであることが求められ、活動費の支給と倉庫の貸与を受ける一方、区へ活動報告書・経理状況報告書を提出する義務を負う。

平成 22 年 4 月 1 日の時点で、区立公園 333 か所及び公園以外の管理地 24 か所合計 357 か所のうち、板橋区地域がつくる公園制度に基づくグループが活動する公園等は 24 か所となっている（平成 22 年 6 月 17 日みどり公園課に電話で確認）。

2 グループけやき結成の経緯と目的

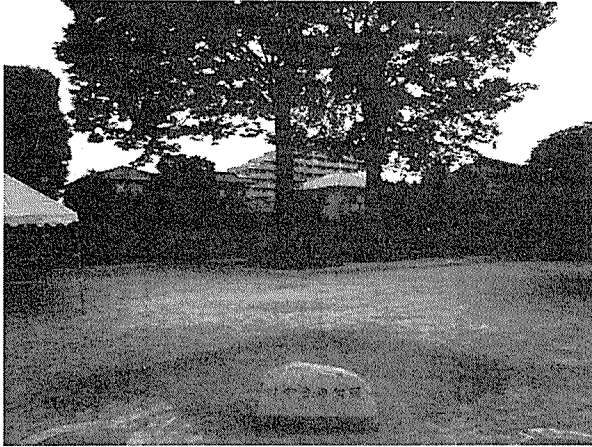
(1) グループけやき結成のきっかけ・経緯

12～13 年前、現在のけやきの公園がある場所は、工場を併設した住宅が建つ個人の敷地であった。この土地が、相続で売りに出されることになったため、近隣住民から区へ土地の取得を要望した。区が取得しなければマンションが建つ可能性が高く、この周辺で行事等を行う場が無く交流の場を望んでいた近隣住民が、商店街の 70 店舗を中心にアンケートを取った上で、区に要望したものである。要望を出しに区に足を運んだのは、現在のグループけやきの中心メンバーである 2 人の方（うち 1 人は商店街会長）である。

断られると思いつつ持っていった要望を、意外にも区が受けてくれ、実際の購入担当の板橋区土地開発公社も協力的であったため、用地買収も含め 8 億円をかけて公園を造成することとなった。これに要する経費の 2～3 割を区が負担し、残りは国費負担とのことである。

公園の新設にあたり、区はワークショップ方式を採用。10 回にも及ぶワークショップでは、突拍子もない意見が出されるなど、会議だけでは収拾がつかない状態になったため、地元住民自ら視察を行い、区と一緒に交流の場としての

公園づくりを目指した。



▲けやきの公園全景

区は、地元の要望を取り入れた公園の案を受け入れてくれる一方、野草等を植栽した公園は区の力（資金・人員体制）では管理できないことを伝えてきた。このため、ワークショップを行っていたメンバー40人ほどを中心に、公園を管理するボランティア団体「グループけやき」を結成。公園の里親制度（現在では「地域がつくる公園制度」へと名称変更）第1号の団体として区と協定を結び、公園の維持・（一部）管理等の活動を行うこととなった。

【経緯】

- | | |
|--------------|---|
| 平成 11 年 11 月 | ワークショップ方式で公園建設に向けた話し合いを開始
以降、計 10 回におよぶワークショップを経て公園計画を作成 |
| 平成 12 年 1 月 | 小学生から公募した公園の名称が「けやきの公園」に決定 |
| 平成 12 年 4 月 | グループけやき結成 |

「公園の里親」第1号として区と協定の調印を行う

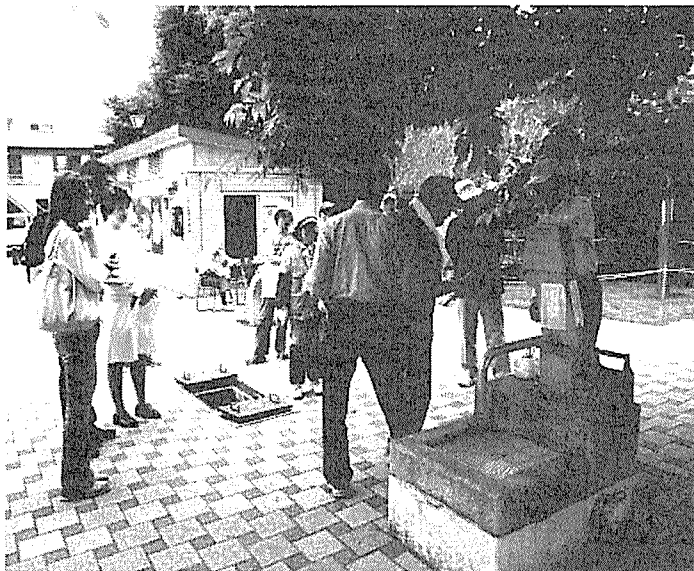
けやきの公園開園式

グリーンフェスタ開催（板橋区主催）

（2）グループけやきの目的と活動内容

結成の際に確認した目標、①自然との共生 ②地域住民との交流 ③防災の拠点 を大きな柱とし、阪神・淡路大震災での教訓を忘れずに、「地域交流」を第一の目的としている。このため、公園の維持・管理の他に、地域との交流イベント等の活動も行っている。

また、グループけやきの他に、花づくりグループさくらの会を結成し、野草を中心とした花壇の維持・管理を行うとともに、寄せ植え講習会やハーブティーの集いなどの行事も行っている。



▲災害時用の井戸とトイレ

活動の主な内容は次のとおり。

- ① 毎週日曜日午前9時（夏季は8時）から、公園の清掃・除草、設備や柵の簡易な補修等
- ② 花壇の手入れ、樹木の剪定、堆肥づくり
- ③ 公園コンサート、防災体験、餅つき体験、こいのぼり大会、七夕まつり、芋煮会、地域との交流イベント等
- ④ 近隣小学校の総合学習時間などにおける協働作業（富士見台小学校児童による公園美化活動など）
- ⑤ けやき通信・さくらの会通信の会報発行、ホームページによる広報活動
- ⑥ 地域のお祭りの際の場所提供

(3) 活動資金

グループの活動資金は、大きく分けて次の二つから調達されている。

- ① 区からの助成金
みどりと公園課提供資料によると、区からの助成金は報償費としてグループに支払われ、その金額は活動面積等に応じて算定されている。
- ② イベントからの収入
年間8回程度自主開催しているイベント等で、ハーブティー等の販売を行うことにより得た収益金を、グループの運営に回している。

3 グループけやきの特徴

(1) メンバーの特徴

グループに登録しているメンバーは、ワークショップのメンバーをベースに40人ほどであるが、実働は15人程度。イベントの際に集まってくるボランティアも含めると20～30人が活動している。

メンバーの年齢構成は比較的高齢であり、最高年齢は95歳。男女構成は半々程度。居住地は周辺地域が中心で、視察当日は

町会長も活動に参加していたが、必ずしも周辺町会に限らず、いたばしボランティアセンター、広報、ホームページや掲示板のけやき通信を見て活動の趣旨に賛同した人たちが集まってくるとのこと。

赤羽から来ているアマチュアカメラマンの方は、公園内の野草の写真を度々撮っていたところ、グループメンバーに誘われ、活動に参加するようになった。「この公園（花壇）には哲学がある！」との的を射た名言を語っている。

また、板橋区立大原公園を擁する町会の会長も活動に参加。けやきの公園での活動を大原公園での活動にフィードバックしているとのこと。一つのグループでの活動に、町会長が二人も参加しているのは珍しいケースである。

都内の情報ビジネス専門学校の警察官志望の生徒さんも、活動体験のお礼に本格的に活動に参加していた。

けやきの公園内にある掲示板のけやき通信を通りがかりにいつも見ていて、退職を機にグループの活動に参加しはじめた方もいた。「退職後の居場所があるのは素晴らしい。」と、多くのメンバーが語っている。

(2) 活動面の特徴

グループの活動面等での特徴は次のとおり。

- ① グループ内に上下関係は無く、気軽に意見を言ったり、アイデアを出し合えたりできる。お互いの身分をあまり明かさずに、前職や肩書き等に囚（とら）われない人間関係づくりをしている。
- ② グループの活動に賛同し、グループへ入りたい人の入会は原則自由、退会も同様に参加しやすい。
- ③ 毎週の活動後に意見交換をし、メンバーの特技やアイデアを活かして活動に結び付けている。
- ④ 活動への参加の強制はしない。メンバーの個人個人が、無理をせず自分のできる範囲での活動を行っている。
- ⑤ 地域の小学校、町会、商店会や企業と協働し、活動のす

そ野を広げている。

(協働の事例：けやきの公園に植栽されているケヤキの落葉を堆肥として利用しているが、落葉掃きから堆肥作りまでを近隣の富士見台小学校の児童が総合学習の一環として行っている。)

- ⑥ ホームページを作成して公開し、また会報を発行するとともに、掲示板において活動内容を周知するなど、広く情報を発信している。
- ⑦ グループの活動により、町会、自治会、商店会、企業、学校など、いわゆる「地域コミュニティ」の結束が強化されている。

(横のつながりが広がっている事例：上記⑤の小学校児童の堆肥づくりの取組みは、グループの広報担当メンバーの1人の方が、小学校のPTAの役員をやっている関係でスムーズに実現した。グループの活動がベースとなって、地域でのコミュニケーションが取りやすくなっている。)



▲小学校の美化・総合学習の一環として作った堆肥について説明する、花づくりグループさくらの会の代表の方

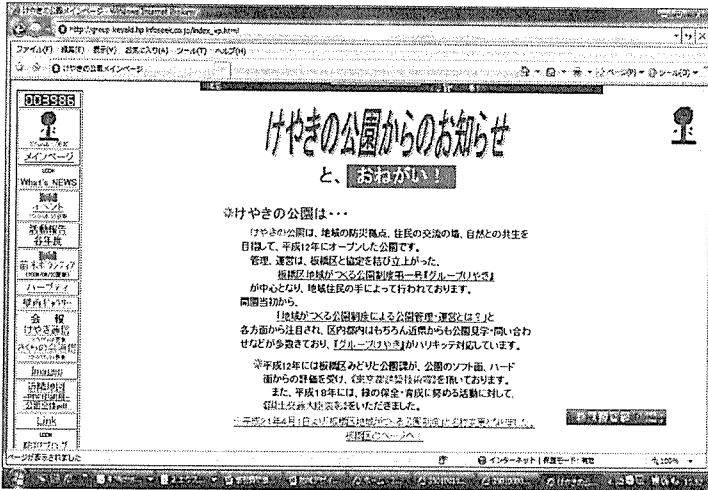
4 活動継続の秘訣と今後の課題

(1) 10年間も活動が継続している秘訣

平成22年4月、グループけやきは結成10周年を迎えた。10年間もの長きにわたり任意団体であるボランティアグループの活動が継続している秘訣はどこにあるのか。ヒアリングの際にグループのメンバーが語っていた内容と、板橋区政策企画課が取りまとめた資料等を突き合わせて考えると、次のことが分かってくる。

- ① まず、グループの中で「偉い人」を作らないことを不文律としていることである。グループ内で上下関係は無い。町会長であろうと、近隣マンションに住む主婦であろうと、地区外から活動のためにやって来る学生であろうと、グループ内の地位に差は無く、ざっくばらんに話ができる雰囲気がある。
- ② また、一人ひとりの個性を大切にしており、誰が何の仕事をするかについて、誰も強制せず、一人ひとりが公園のために良かれと思い自主的に掃除や除草を行っている。仕事自体は自然発生的のようであるが、活動の後のミーティング等で意見を交わしているので、お互いの仕事のグループ内での位置付けについて、緩やかに確認が行われている。
- ③ 活動後のミーティングの中では、グループの活動に関することばかりでなく、年金等の時事問題や老人ホームの良し悪しなどについても積極的に話し合われている。話題や知識の共有と、お互いに知恵を出し合う等の過程を経て、信頼関係が生まれ、維持されてくると考えられる。
- ④ 活動のPR方法がしっかりしている点も見逃せない。ホームページの作成・更新に力が入れられており、我々大東大・板橋区の共同研究の視察についても、けやきの公園通信としてわずか数日でアップされ紹介されていた。また、紙ベースのけやき通信の配布や、掲示板の有効活用等、アナログからデジタルまでの手段を使って、幅広い世代に対して、地域から日本中にまで対象を広げながらグループの

活動を PR している。



▲けやきの公園 HP。イベント等情報提供やボランティアの募集を行っている。(けやきの公園 HP <http://grup-keyaki.hp.infoseek.co.jp/>)

- ⑤ キーマンの存在も大きい。グループのメンバーは、明るく積極的に地域に愛着を抱いている方々が多いが、中でも今回の視察の窓口役になっていただいた花づくりグループ さくらの会の代表の方の明るく気さくな人柄は素晴らしい。また、グループの立ち上げから携わっている2人の方（うち1人は商店街会長）についても、比較的高年齢の男性であるが気さくで話好きで、多くのメンバーがグループのキーマンであることを認めていた。
- ⑥ 区側にもキーマンがいたという。公園の買収やワークショップの立ち上げの際に尽力したのは、当時のみどりと公園課長。東京都から出向してきた課長であったが、板橋区の公園整備に先駆的にワークショップ手法を取り入れたり、公園の里親制度（現在の地域がつくる公園制度）を創設してグループけやきの要望に応えるなど、多くの改革を成し遂げた課長であった。平成21年度末をもって都市整

備局緑地景観担当参事として東京都を退職されたが、平成22年5月2日に行われたグループけやき主催の公園開設10周年イベントに出席するなど、今でも公私にわたりグループけやきとのお付き合いを続けている。

(2) 「地域がつくる公園制度」に対する考え方

ヒアリングの際に、「これからの時代にあって、地域がつくる公園（制度）は、どういう展開をしていったら良いとお考えですか？」という質問をグループのメンバーの方々にぶつけたところ、「区は、すぐに「お金を出す。」というような発言をするが、我々が欲しいのはお金ではなく心。」という回答がメンバーから一様に返ってきた。資金を使えば良い公園づくりができる訳ではなく、人と人との信頼関係があってこそはじめて、地域の公園づくりが可能であるとの意である。

また、地域の公園づくりというものは、行政だけ、地域だけでは成り立たない。地域住民が知恵を出し合い、それぞれの特技を生かしつつ、行政と一緒にあって、“生きている公園”づくりを進めることが大切であり、このようないわゆる“けやき方式”の公園づくりが各地に広まっていくことを願いたい。“生きている公園”にあって、われわれグループのメンバーもみんなここで“生かされている”とも語っていた。公園への感謝の心と愛情が、ヒアリング時のやり取りの中から伝わってきた。活動が継続している秘訣がここにもあると考えられる。

(3) 活動に対する今後の課題

次世代の育成が最大の課題である。グループのメンバーは高齢化してきている。一方で、若い30代から40代の人たちは仕事や子育て等で多忙で、活動に参加できない。定年で仕事を終えた人たちが、自分の居場所づくりの一環として活動に参加してくれることを期待しているという意見が、メンバーの多くから出された。生きがいづくりという意味でも賛同できる考え方であり、グループの今後の仲間づくりに期待したい。



▲視察風景

